

バードリサーチ ニュース

2010年5月号 Vol.7 No.5

Passer montanus
Photo by Watanabe Yoshiro

活動報告

鳥のお家をつくろう！in小学校

本山裕樹

今年度から始まった巣箱プロジェクトの一環として、横浜市の小学校の「総合的な学習の時間」を、バードリサーチが年間を通して支援することになりました。「総合的な学習の時間」とは、探究的な学習を通して、学び方やものの考え方、人とのコミュニケーション能力などの育成を目的とした学校のカリキュラムのひとつで、授業内容は自然観察や社会科見学、ゴミ問題への取り組み、地域のお年寄りとの交流会などさまざまです。バードリサーチの支援する「総合的な学習の時間」では、蓄積された研究データを元に自然環境や調査について体験学習し、結果を研究にフィードバックさせていくといったバードリサーチならではの授業を目指しています。今回の教室では、学校の先生方と協力し、鳥の巣箱をきっかけにして野鳥やそれを取り巻く自然環境についての理解を深め、そこから子供たちの考える力を養っていくこと、巣箱をつかった調査により幅広く多くの人に参加してもらうことを目的としています。

今回は第一回目の巣箱掛け教室を行いました。

巣箱についての座学

今回の教室の対象は4年生の4クラス、146人の子供たちです。第一回目ということもあり、子供たちがどれくらい鳥を知っているのかを把握することと、子供たちとのコミュニケーションのために、はじめに簡単な座学を行いました。子供たちに「鳥にとって巣箱ってどんなところ？」「どんな鳥が巣箱に入るの？」と問いかけてみると、「子育てをすところ！」「スズメ！シジュウカラ！」とすぐに元気な答えがかえってきました。子供たちの興味の高さと巣箱について意外とよく知っていることに感心しまし



写真2. 座学の様子。

た。その後、鳥の鳴き声をスピーカーから流したり、プロジェクターをつかってシジュウカラの子育ての写真を見せ、巣箱の役割や繁殖期の行動について学習をしてもらいました。

巣箱のアレンジ

巣箱を掛ける前のお楽しみタイムです。5～6人の班に分かれて、班ごとに1つの巣箱に絵や文字を書いてもらいました。鳥、植物、昆虫、果物などの絵を描いたり、自然に溶け込むように緑色に塗ったり、思い思いのオリジナル巣箱を楽しそうにつくっていました。



写真3. 一つ一つオリジナルの巣箱に仕上げる。

巣箱掛け

子供たちには、巣箱を掛ける場所は「高さ2～4mくらい」「出入口は開けた方に向ける」「へびやネコがこないところ」など最低限の情報だけを伝え、実際の掛ける場所は子供たち自身に選んでもらいました。班ごとに巣箱を持って掛ける場所を探す子供たちの後ろから、バードリサーチのスタッフが脚立をもってついていきサポートしました。こちらが思っていたよりも子供たちの判断力と決断力はすどく、鳥が入りそうな良い場所を次々と選んでいき、「ここに掛けて！」との声があちこちから聞こえてきて、スタッフはてんてこ舞いでした。

今回は小学校の校庭に14個、近くの公園に15個の巣箱を設置できました。巣箱掛けの後日に先生に子供たちの様子を聞いてみると、巣箱を遠くから観察したり、鳥の鳴き声に興味を示す子供たちが増えたとのことでした。今後の展開としては、校庭や公園内にいる野鳥の調査、シジュウカラやスズメのエサとなる昆虫や植物の調査など、野鳥に関連する自然環境についての授業を考えています。



写真4. 巣箱を掛ける場所を探す子供たち。

レポート

カワウ 夜のおでかけ？

加藤 ななえ

カワウ的生活

カワウは、毎日、夜明けとともにねぐらから採食地へと飛び立ちます。そして午後から夕方にかけて、夜を過ごすねぐらへ帰ってきます。これが「カワウ的生活」のパターンです。各地で行われているカワウの生息数



調査は、この習性を利用して行われています。それぞれのねぐら場所で日の入り2、3時間前に既にねぐらにいるカワウを数えておいて、日の入りの約20分後までその出入りをカウントし、その日にねぐらをとったカワウの数を調べて、その地域の生息数を推定します。帰還の時間帯や群れの規模などは、採食場所との距離や、繁殖期であるか否かや、天候などによっても変わってきますが、基本的にカワウは夜間にはねぐら場所で休息しているものと考えられています。

グリーンランドでは

ニュースレターの2009年1月号に、グリーンランドのカワウの採食についての論文が紹介されています。グリーンランドは高緯度に位置するため、真冬にはほとんど太陽が昇りません。そのため昼間しか活動できないとなると、採食に費やせる時間が低緯度地域よりも極端に短くなってしまいます。潜水深度を記録することができるデータロガーを使った研究から、この地域では真っ暗になる時間帯にもカワウが潜水していることが分かりました。夜間にも採食できる能力がカワウにあるのであれば、日本ではどうだろうか興味をひかれた方もいたのではないのでしょうか。カワウのねぐら調査から、夜間に採食しているのではないかと思われるカワウの動きを観察したので報告します。

夜なのに

2010年3月31日（日の入り時刻18:00）に、東京湾奥の三番瀬に近い千葉県市川市にある行徳鳥獣保護区のコロニー（繁殖が行われているねぐらのこと）で調査をおこないました。繁殖活動が賑やかな時期にあたり、巣作りから巣立ち間際までさまざまな段階の879巣（注：空巣を含む）がありました。コロニーからは餌をねだるヒナの高い声がさかんに聞こえてきました。そのために親も交代で採食に出かけるので、帰ってくるカワウと出ていくカワウがコロニーの上空で交差していました。それでも17時半くらいまでは順調にコロニーにいるカワウの数が増えていきました。しかし、その後、なんと、出ていくカワウが多くなり始めたのです。日が沈んでも、カワウは出ていき

ます。カワウの姿が、双眼鏡でかろうじて見えるくらいにまで暗くなっても、まだ出ていくのです。さすがに双眼鏡でも観察することが無理になってしまい、日の入り後25分に調査を終了しました。

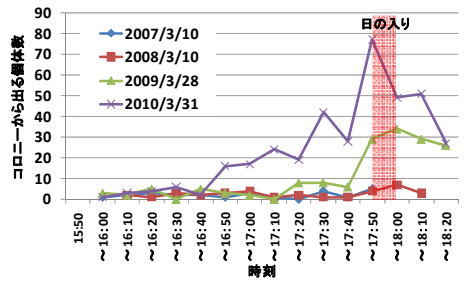


図1. コロニーから出て行くカワウの10分ごとの変化 (2007年～2010年の3月調査)

カウントした数を10分ごとに集計したところ、コロニー内のカワウが最も多くなったのは17時10分から20分にかけての1515羽で、18時25分の調査終了時にはその時よりも91羽少ない1424羽という結果になりました。そこで、この場所で調査されていた2007年からの3月のデータを整理して、この時期のねぐらから出ていくカワウをグラフに表しました（図1）。2007年3月10日と2008年3月10日の調べでは、調査終了時に出て行くカワウはほとんどいません。ところが、2009年3月28日と今年（2010年）は調査終了時にも出て行くカワウがいたことがわかりました。

夜間採食の可能性

なぜ、カワウは日没後にもコロニーから出て行ってしまうのでしょうか。カワウが出て行く方向の行徳鳥獣保護区の東には、東京湾に残された貴重な干潟の一つである三番瀬があります（図2）。そこで考えられるのは、採食のために出かけているのではないだろうかということです。そうだとしたら、なぜこの3月下旬に限って夜の採食が盛んにおこなわれるのでしょうか。成長段階の後期になり大きなヒナが増えて、その分ヒナは食物の要求量が多くなるので、それに応えるために夜になっても魚を採りに行かなければならないせいかもしれません。そのほか、海の魚のほうにカワウを引き寄せるような現象が起きている可能性はあるのでしょうか。3月31日は満月の大潮。魚が浅瀬に集まればカワウにとって有利になりそうです。ちなみに、三日月だった4月8日にも同じ調査をしてみました。その時も3月31日と同様の結果を得ました。今後、新月の時の確認もしてみたいと思います。



図2. カワウが主にねぐらから出て行く方向と三番瀬の位置。

今回は、行徳鳥獣保護区のデータだけを掘り起こしてみました。同じ東京湾にある第六台場や新木場、そして内陸部にある森林公園などのコロニーもチェックしてみようと思います。また行徳鳥獣保護区コロニーからの「夜のおでかけ」先での行動を把握できるような調査も組んでいきたいと思っています。みなさんの地域ではカワウの「夜のおでかけ」はありますか？観察情報等ありましたら、教えてください。

海外情報

フランスのボランティア調査30年 ～保護区設置の成果と普通種の減少～

菊地有子・高木憲太郎

1979年に欧州共同体は、欧州各国の野鳥とその生息地を保護する「国際協定(EU Directive)」を定め、各国はそれを受けて保護区の設置や調査を実施してきました。昨年の2009年は協定が定められてから30年の節目の年でした。会員の菊地さんに翻訳していただいた記事をもとにフランスの鳥類調査を紹介するコーナー第2弾の今回は、フランス鳥類保護同盟(LPO)が発行するニュースレター「LPOinfo」に掲載されていた、保護活動の成果について30年間にわたる調査をもとにまとめた記事をご紹介します。

保護区設置の成果と普通種の減少

LPOでは、フランス国内の他の研究機関や環境保護団体と共同で「フランスの鳥類調査」や「普通種の期間調査」など、ボランティアによる一斉調査を実施してきましたが、国際協定が定められてから30年を経た昨年、これまでの記録をまとめました。その結果、保護区の設置などが行なわれた種は回復傾向にあることがわかりました。フランスで繁殖しているレッドリストで絶滅の危険性が高い特別保護鳥(アネックスI類)88種のうち、クロハゲワシやクロヅル、コウノトリ科の鳥など約37%の種が増加していたのです(図)。



写真. クロヅル。
[Photo by 谷 英雄]

一方、レッドリストに載っていない普通種では減少傾向が目立ち、ウグイス科やツバメ科の鳥、アリスイなど昆虫食の

渡り鳥、ヒバリ科やホオジロ科の鳥など農地に生息する鳥、モリムシクイなどの森林に生息する鳥が減っていました。特にウソ、スズメ、ムネアカヒワの減少が著しいと指摘しています。個々の鳥がどんな変化

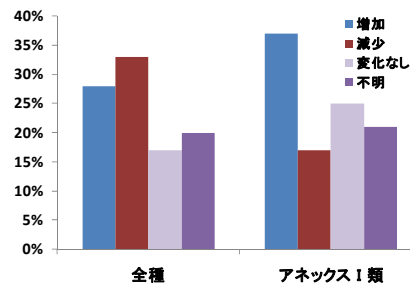


図. フランス国内で繁殖している鳥類の生息数の推移。

をしているのか、気になるところですが、記事ではそこまで詳しく紹介されてはいませんでした。報告書を手に入れたら、ご紹介したいと思います。

欧州共同体の協定を受けて、フランスではLPOをはじめとする多くの自然保護団体が保護区の設置に努力を重ね、2009年までに390あまりの保護区が設けられました。これらの保護区は欧州共同体のアネックスI類とされた種の生息地に優先的に設けられています。

記事では、30年間の調査によって、保護区を設置して重点的に保護してきたことの有効性が証明されたと書かれていて、さらに、調査によって今後優先的に保護すべき鳥のリストが作れるようになったことも成果の一つとしてあげています。一方、普通種で減少が多く見られたことについては、これらの鳥が広く分布するため、保護区の恩恵を受けられないことや、生息地が多くの脅威にさらされていることを理由としてあげています。

日本でもスズメの減少が指摘されていますが、その他の鳥でも知らない間に減少している、ということがあるかもしれません。バードリサーチでもこのようなまとめが出来るようになります。長期にわたる全国的な調査は、会員の皆さんのご協力が不可欠です。続けていくことは簡単ではありませんが、今後ともご協力をお願いします。

図書紹介

雑木林の博物誌 ①冬の鳥たち

大屋厚夫 / 出版芸術社 定価4,600円(税別)

私が読んだことのある野鳥についての書籍では最も秀逸なひとつで、ぜひ皆さんにもお勧めしたい一冊です。

本書を開くとまず、ページの中で動き出しそうなほど生き生きとした鳥の写真に見入ってしまうでしょう。しかし写真の美しさもさることながら、本書を際立たせているのは著者が野鳥の生態を語る文章の巧みさにあります。一見すると写真集のようですが、タイトルに「自然誌」と銘打っているように、これは雑木林の冬鳥についての生態や分類について書かれている本であり、普通の写真集よりもかなり長めの文章が添えられています。文章だけの解説書は読むのがしんどいんだけど写真集ではもの足りないと思うことがあるのですが、巧みな語り口の解説を上質の写真と組み合わせた本書は、さながらスライドを見ながら講演を聞いているかのようで、これまでになかったタイプの自然誌書になって

いると思います。本書では23種の野鳥について既知の研究結果や著者自身の観察に基づいた解説を組み合わせで説明が書かれています。例えばモズの章では「はやにえ」の役割について唱えられている諸説を総覧したあとで、著者自身の観察事例によってそれらの検証を行い、さらに「毒のある生きものを乾燥させてから食べる役割もありそうだ」という自説も提示するなど、謎解きを読むようなおもしろさもあります。

大屋氏は現在日本蝶類学会の会長をされている方ですが、かつて清棲幸保博士に従事し、日本鳥類大図鑑にも若き日の大屋氏による写真や解説文が掲載されているそうです。



【神山和夫】

チュウヒ 英: Eastern Marsh Harrie 学: *Circus spilonotus*

1. 分類と形態

分類: タカ目 タカ科

全長: ♂480mm, ♀582mm 翼長: 380-430mm
 翼開長: 1132-1372mm 尾長: 215-262mm
 嘴峰長: 28-31mm ふしよ長: 85-91mm
 体重: 498-844g
 ※榎本(1941)による.

羽色:

羽色は、個体によって様々で、全体に茶褐色の個体、頭部から翼の前縁部にかけてクリーム白色の個体、淡い褐色で胸から腹部に縦斑があり翼の雨覆が青灰色で尾羽が灰褐色の個体などさまざまである。こうした羽色の違いは、雌雄や年齢、繁殖地など異なると言われているが(森岡ほか1995)、詳しいことは明らかでない。



写真1. チュウヒ。
[Photo by 小堀 脩男]

鳴き声:

縄張りに他個体が近づくとミビヤア、ミビヤアと鳴く。また、争いの際や他の猛禽に対してキャキャキャキャと鋭い声を出して威嚇する。さらに、オスは繁殖期の空中ディスプレイの際に、クェ、クェと鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

バイカル湖付近からウスリー地方、モンゴル、中国北東部、日本などで繁殖し、日本や台湾、ボルネオ、フィリピン、東南アジア、中国南部などに渡る。

生息環境:

海岸付近の干拓地や大きな湖沼の周り、大河川の下流域などの広大なヨシ原である。

3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

繁殖システム:

繁殖期 非繁殖期

多くは一夫一妻であるが、一夫多妻でも繁殖する。ロシアのバイカル湖付近では一夫二妻は観察されていないというが、日本では新潟県佐潟で1例報告されている(千葉2008)。

繁殖地では早いところでは3月ごろから空中ディスプレイが観察されるようになり、つがい形成される。産卵は4月中旬から5月に行なわれ、7月ごろ巣立つ。越冬地では10月ごろから生息するようになる。冬期は、日中には単独で縄張りを構えるが、夜間には集団罠を形成する。

生息数:

日本における繁殖つがい数は、確実に繁殖が確認されているもので30~40つがいと推定されている(浦2008)。しかし、北海道などではまだ未発見の営巣地があると考えられ、実際のつがい数はもう少し多いと思われる。一方、国

内の越冬個体の総数は、一部の地域における就罠個体数を別にすればまったく調査されていない。

巣:

巣は、地表に水のあるヨシ原や乾燥したススキなどの高茎草原の地上に枯れ草を積み上げて造られる(西出1979, 多田2007, 納家ほか2007, 千葉2008)。巣の大きさは、約110~130×80~90cmと報告されている(千葉2008, 納家ほか2007)。

卵:

卵は灰白色で、平均48.0mm×38.0mm(N=5)の楕円形に近い(千葉2008)。一腹卵数は4~7卵(千葉2008, 西出1979)で、産卵は平均3.3日間隔で行なわれる(西出1979)。

抱卵・育雛:

抱卵はおもにメスが行なう。抱卵日数は約28~34日の範囲と報告されている(千葉2008)。繁殖期はおもにオスが狩りを行なう(西出1979)。ヒナは孵化後約28日で巣を離れ、ヨシ原内を移動する(西出1979)。

ロシアのバイカル湖付近での調査によると、産卵された卵のうち巣立つことができたのは27~43%であった(Fefelov 2001)。

罠および就罠行動:

渡良瀬遊水地での観察から、罠環境は、ヨシやオギなどが疎らに生育し、下層にスゲ類やイネ科植物が高さ30~50cmに密生する場所である(平野ほか1998)。地上で就罠し、罠には夜間チュウヒがうづくまってできた寝床が点在する(写真2)。

罠入り時刻は日没後20~30分がもっとも多く、朝の飛立ち時刻は日の出前20分ごろが最も多い(平野ほか1998)。



写真2. チュウヒの夜間の寝床。

4. 食性および狩り行動

日本での繁殖期の食性については断片的な観察例しかない。千葉(2008)によると新潟県佐潟ではネズミ類が多く、ヒバリも捕食した。ロシアのバイカル湖付近ではハタネズミ類が80%、小鳥類が20%であった(Fefelov 2001)。越冬期の食性は、渡良瀬遊水地ではカモ類を中心とした大型の鳥類が多く38.6%、スズメやヒバリなどの小型鳥類9.4%、ヒヨドリ、ツグミ類の中型鳥類4.7%、ハタネズミやジネズミなどの小型哺乳類31.9%、イタチなどの中型哺乳類2.8%、魚類1.7%と幅広い食性をしている(平野ほか2006)。

狩りの方法は、ヨシ原の上をゆっくり飛行して、地上付近の獲物を見つけると急に方向を変えダイビングして襲う「不意打ちハンティング」と呼ばれるもの、他のチュウヒや猛禽が捕殺した獲物を横取りする海賊行為、死体を摂食するものなどがある。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 冬期の採食環境

チュウヒの越冬環境は広大なヨシ原である(写真3). しかし, どのような構造をしたヨシ原がチュウヒにとって住みやすい環境なのだろうか.

まず, 渡良瀬遊水地で, 2000年の冬期に野火によって消失した裸地と隣接するヨシ原に調査区を設定して, 探餌飛行の利用頻度を比較した(平野ほか 2003). その結果, チュウヒは探餌飛行の際に野火による焼失地より燃え残ったヨシ原を有意に多く利用した(図1). これは, チュウヒのハンティングに草丈の高いヨシ原が不可欠であることを示唆している. このことは, 渡良瀬遊水地内の谷中湖の植栽された浮島設置区と湖面のみの調査区との利用頻度の調査でも, チュウヒは浮島の周囲で頻繁に探餌飛行を行ない, 浮島のない湖面だけの場所はほとんど利用しなかった(平野 2005)ことから明らかである.

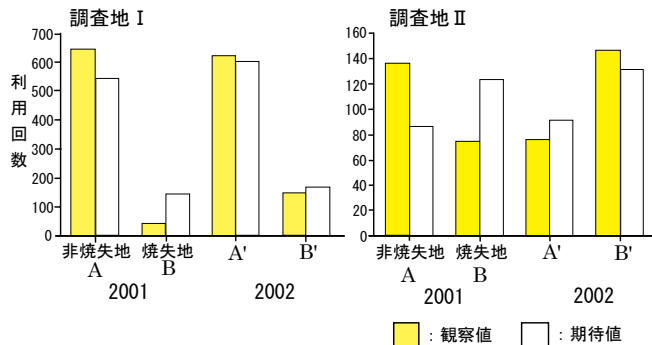


図1. ヨシ焼失地とヨシ原での探餌飛行における利用回数の比較. 調査地 I, IIとも, 2001年は焼失地(B)の利用回数が有意に少なかったが, 2002年にヨシが回復した状態(B')になると利用回数に差はなくなった.

さらに, 池沼や水路, 管理用の道路が縦横に走る人為的に造成されたヨシ原と隣接する乾燥したヨシ原のみの調査区とでチュウヒの探餌飛行の頻度を比較した(平野 2008). その結果, チュウヒは, 2シーズンとも前者のヨシ原を後者より有意に多く利用した(図2). こうした探餌飛行の利用頻度の違いは縄張り個体だけでなく侵入個体も同様であった. また, 池や水路を含むヨシ原の調査区では, 調査区を100m×100mのメッシュに区切り, チュウヒの探餌飛行の頻度を比較したところ, 水路や池を含むメッシュは, 植物だけのメッシュより有意に多く利用された.

これらのことから, チュウヒのハンティングには草丈の高い

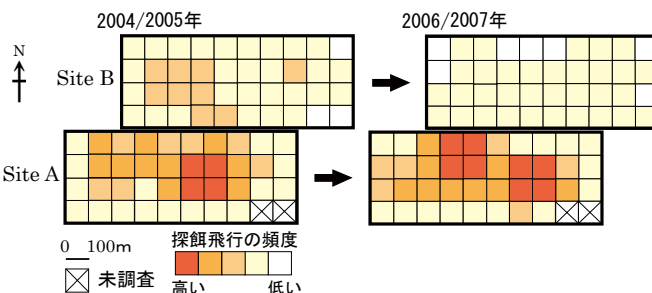


図2. 複雑な構造をしたヨシ原(Site A)と単純な構造のヨシ原(Site B)のチュウヒによる利用頻度の比較.

草原が不可欠であるが, 単調な環境より細い水路や池沼が点在する複雑な環境がより好ましい環境と考えられた. こうした水路や沼を含むヨシ原がチュウヒに頻繁に利用される理由は, これらの環境にはカモ類などチュウヒの主要な獲物が多く生息すること, そのような複雑な環境は, チュウヒの主要な狩りの方法である不意打ちハンティングに適した環境であるためと考えられる. したがって, チュウヒの生息環境の保全には, 池沼や細い水路などが含まれる多様なヨシ原を保全し創出することが重要であろう.



写真3. チュウヒの越冬環境. (渡良瀬遊水地)

6. 引用・参考文献

千葉 晃・佐藤吟一. 2008. 新潟市佐潟におけるチュウヒ *Circus spilonotus* の繁殖について. *Strix* 26:81-95.
 榎本佳樹. 1941. 野鳥便覧. 日本野鳥の会大阪支部.
 Fefelov I V. 2001. Comparative breeding ecology and hybridization of Eastern and Western Marsh Harriers *Circus spilonotus* and *C. aeruginosus* in the Baikal region of Eastern Siberia. *Ibis* 143: 587-592.
 樋口孝城・広川淳子・浜田 強. 1999. 北海道石狩川下流域におけるチュウヒ *Circus spilonotus spilonotus* の繁殖状況. *山階鳥研報* 31:103-107.
 平野敏明. 2005. チュウヒの採食環境としての人工浮島の効果. *Bird Research* 1: A15-A23.
 平野敏明. 2008. 越冬期におけるチュウヒの探餌環境選択. *Bird Research* 4:A9-A18.
 平野敏明・遠藤孝一・君島昌夫・小堀政一郎・野中純・内田裕之(1998)渡良瀬遊水地における秋冬期におけるチュウヒのねぐら. *Strix* 16:1-15.
 平野敏明・君島昌夫・小堀政一郎. 2003. 野火が冬期のチュウヒの採食行動におよぼす影響について. *Strix* 21: 71-79.
 平野敏明・小池勲・塚原千明(2005)渡良瀬遊水地におけるチュウヒとハイイロチュウヒの冬期の食性. *日鳥会誌* 54: 29-36.
 森岡照明・叶内拓哉・川田 隆・山形則男. 1995. 日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.
 西出 隆. 1979. 八郎潟干拓地におけるチュウヒの繁殖記録. *山階鳥研報* 11:109-120.
 納家 仁・小海途銀次郎・清水俊雄. 2007. 大阪府におけるチュウヒの繁殖確認. *Strix* 25:99-103.
 多田英行. 2007. 仏沼におけるチュウヒの繁殖記録. *Strix* 25:87-93.
 浦 達也. 2008. 国内のチュウヒの現状と晒されている脅威. 「チュウヒ Harriers. 全国の繁殖地・生息地から」近藤義孝編. pp.16, 日本野鳥の会三重県支部・日本野鳥の会愛知県支部・名古屋鳥類調査会, 桑名市.

執筆者

平野 敏明

NPO法人パードリサーチ 研究員



最近では, 1年の多くの時間を渡良瀬遊水地の鳥の調査に費やしています. 特に, ここ数年はチュウヒの越冬生態から離れ, クイナ類やサンカノゴイ, オオセッカの生息状況を調査しています. 渡良瀬遊水地を湿地性の鳥たちのさらなる楽園にするための基礎資料を得ようと, 眠い目をこすりながら早朝の暗闇を歩き回る日々です.

参加型調査

リュウキュウサンショウクイは どこまで分布しているか？

バードリサーチ 嘱託研究員 三上 かつら

GWも終わり、山々が鮮やかな萌黄色になってきました。常緑広葉樹でモコモコしていたり、ようやく芽吹き始めた落葉樹が山に色を添え始めていたり、地方によって様々な装いが見られる頃かと思われます。

そんなころあいの山の中や都市部で「ピリリリ…」という声を耳にすることがあります。夏鳥のサンショウクイです。飛んでいたり、木々の高いところにとまっていたりすることが多いですが、その高い涼やかな声ですぐに気づくことができます。

サンショウクイは現在、環境省のRDBで絶滅危惧Ⅱ類(VU)に指定されています。いるところではその特徴的な声が耳につきやすいので、「あそこにはいっぱいいる」と思っている方も多いかもしれません。ですが、そういう場所は減ってきているようです。環境省の自然環境保全基礎調査によると、1974～1978年と1997～2002年の間に、記録されたメッシュは330メッシュから224メッシュに減少してしまっています。

亜種により異なる分布の動向

全国的にはこのように減少していますが、同じ調査結果でも九州南部では逆に記録メッシュ数が増加しています。日本に生息するサンショウクイには「亜種サンショウクイ」と

「亜種リュウキュウサンショウクイ」の2亜種がありますが、「サンショウクイ」が減少している反面、「リュウキュウサンショウクイ」は分布を北に広げているようなのです。近年も分布の拡大が進み、九州北部や四国でも観察されるようになっていきます。また、亜種リュウキュウサンショウクイは越冬期にもこれらの地で確認されていることから、夏鳥ではなく留鳥として生息しているものと思われます。

そこで、「亜種リュウキュウサンショウクイ」および「亜種サンショウクイ」の分布状況の変化をつかむために情報収集をすることにしました。観察された方はその観察場所や状況についての情報をお送りください。また、いま現在だけでなく、過去の情報についても募集します。例えば「3年前の冬に九州に旅行に行ったらサンショウクイが鳴いていてぎょっとした」というような記録でもお寄せ頂けるとありがたいです。確認情報は下記URLから入力・送信してください。

皆様の情報をお待ちしています。



写真: リュウキュウサンショウクイ。

[Photo by 橋田 晃浩]

■サンショウクイ分布調査

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/sanshokui/

図書紹介

猛禽類学

山崎 亨 監訳／文永堂出版 定価18,000円(税別)

2007年にデビット M. バード博士らによって編集された Raptor Research and Management Techniques は、1987年に出版された Raptor Management Techniques の改訂版です。扱っている内容は多岐にわたり、猛禽類研究の総括、野外調査に関する技術、生理・病理学的な知見、保全管理に関する情報に大きく分けられ、25の節を専門家が分担執筆しています。膨大な猛禽類研究の整理を行って、今後の研究や保全に役立てようとした編集者の意図があり、今回紹介する本書は、その意思を脈々と受け継いだ邦訳書となっています。

猛禽類に関する参考資料や事典として、また、これから猛禽類を研究する人にとっては、研究の足がかりを得ることもできれば、研究の具体的な計画を練ることに利用できる必携の本だと思えます。ただ、せっかくなので日本の研究の現状や法規制などが付いているとより便利だったと思います。

猛禽類の生態を研究する人が増え、日本版猛禽類学が発行されるといいですね。



【守屋 年史】

バードリサーチニュース 2010年5月号 Vol.7 No.5

2010年5月20日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 守屋年史

表紙の写真: スズメ